

近年の産卵期におけるセタシジミの資源構造

井戸本 純一

1. 研究目的

セタシジミの漁獲制限体型の引き上げによる資源管理は、若齢貝の資源を温存するとともにその産卵機会を確保することを目的としている。しかし、一方で大型貝に対する漁獲圧力が高まることが予想される。毎年、禁漁期に同一の標本船を用いて実施している漁獲物調査は、若齢貝の定量性に難があるものの、禁漁前の漁獲実態と産卵期の資源構造を反映したデータが蓄積されていると考えられる。そこで、過去の調査結果から、制限殻長が15mmから18mmに引き上げられた2006年を中心に、近年の主要漁場におけるセタシジミの資源構造の変化を推測した。

2. 研究方法

調査で入網したセタシジミを現在の制限殻長（18mm）でつぎの2群に分別し、曳網面積からそれぞれの単位時間あたり漁獲量（C P U E）を推定した。

一次資源……漁獲対象となる資源（単位重量あたりの産卵量が多い大型貝）

二次資源……温存すべき資源（単位重量あたりの産卵量が少ない若齢貝）

3. 研究結果

2004年から2005年にかけて、二次資源の平均C P U Eが58.5kg/hから14.2kg/hに激減しており、何らかの環境異変があったことがうかがわれた。

一次資源の平均C P U Eは、2007年に5.1kg/hまで減少し、漁獲圧力が高まった可能性を示したが、翌年以降は10kg/h前後に回

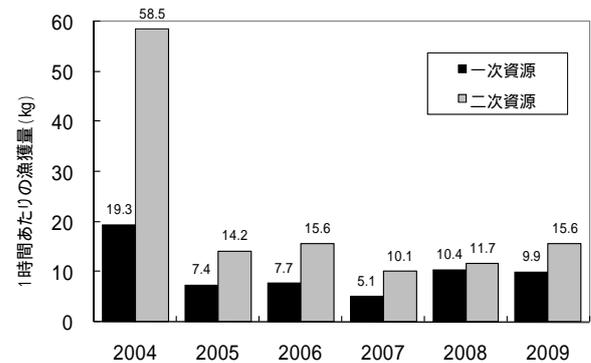


図1 禁漁期における推定C P U Eの推移。

復した。また、二次資源の平均C P U Eは、2007年を最低として増加傾向を示している。

漁獲物に占める二次資源の割合は、水深が浅くなるにつれて低くなる傾向が認められ、浅場と深場で資源構造が異なる可能性が示された。

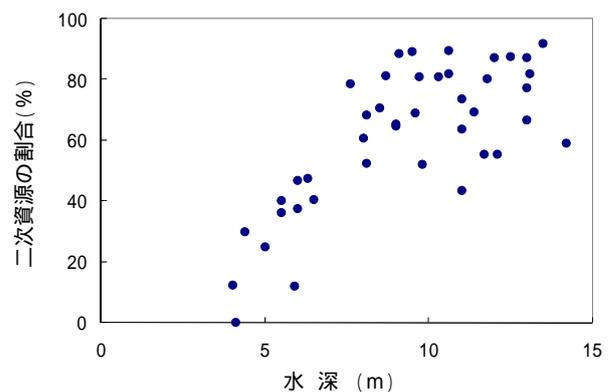


図2 二次資源の混入率と水深の関係。

4. 研究成果

制限殻長の引き上げが資源回復に寄与しはじめている可能性が示されるとともに、二次資源の割合が低い浅場での資源管理のありかたに課題が見いだされた。